



# 葉

全作品と講評  
[www.columnland.net](http://www.columnland.net)

木の葉もく

葉々は木の為に身を投げる

ぼくは母の為に何をした

日本には「葉」という文字を使った駅名がたくさんある。全国を自渡してみると、計りもの駅が「葉」を使っている。由来について見て行きたい。なお、東葉南線鉄道千葉直恵の終着駅である東葉勝田駅は、今社名を頭につけて「葉」という字を使っているだけであり、また福島の常磐線の双葉駅は福島第一原発の事故の影響で未だに運転再開のめどが立っていないため、今回取り上げないことにする。この他にも最近作られた駅の中には良いイメージを作らため「葉」という文字を使っている。茨城県のつくばエクスプレスの柏の葉キャンパス駅、東京都半田相模原線の若葉駅、東武池袋線の青葉駅、埼玉県東武東上線の若葉駅が当てはまる。

東京都の隣りにある千葉県には、「千葉」という形で「葉」という文字を使った駅名がたくさんある。総武本線・外房線の千葉駅の他、総武本線の西千葉・千葉中央・千葉寺駅、京葉線・千葉都市モノレール1号線の千葉みなと駅と外房線の本千葉駅、形成千葉・千原線の新千葉・京成千葉・千葉中央・千葉寺駅、千葉都市モノレールの烏線千葉公園駅、北総鉄道・成田スカイアクセス線の千葉ニュータウン中央駅へ、実に11もの駅に「千葉」という言葉が入っている。「千葉」の由来は、葉がたくさん重なり合った様子を表していたこと由来している。

山手線・京浜東北線・総武線各駅停車・つくばエクスプレス・地下鉄日比谷線の秋葉原駅も知っている人が多いと思う。この地には林業社があり、また江戸時代には火事の時の避難地としての原っぱが広がっていたことから、この地を秋葉つ原と呼んでいたがこの地の由来である。昔は「あきはほら」と呼んでいたのがいつの間にか「あきはほら」と呼ばれるようになった。「あきはほら」と今でも読んでいたら、今流行りのアイドルグループもAKBではなぐAKHと呼んでいるのかもしれない。関東地方になく、あまりなじみのない駅の説明は簡単にしようと思っ

北海道室蘭本線には青葉駅がある。葉っぱが青々としている所から名前がとられたのである。

秋田県の秋田内陸縦貫鉄道には葉駅がある。この駅の切りでは昔から良質の松が取れることで有名で、林業が盛んだった。木材としての葉はこの地に多く残っていたことからこの地名がついた。

徳島徳島越前線磐城常葉駅、山梨直身延線甲斐常葉駅の由来は、この地域には葉が常態たくさん生えていたこと由来している。

大阪府足阪本線の樟葉駅は少しユニークな由来がある。今から100年以上も前、戦争と負けた王が葉を種にもらしてしまつたところから「くすは」と呼ばれるようになり、その音かままって「くすは」と呼ばれ葉がもたらされた今この駅名になった。

兵庫県神戸電鉄粟生線の葉多駅の付近には、昔多くの木があり、緑の葉が青々と茂っていた所からこの地名の由来が来ている。

熊本県の鹿島本線には木葉駅がある。この駅の北の方には昔から木葉山と呼ばれている山があり、住人も親しまれていたためこの地名を駅名として採用することになった。

同じく熊本県肥後線には葉木という駅があるが、この駅の由来は長く分からなかった。ただ、近くに破木というバス停があるので、昔の人の書き間違えを言う可能性が高い。

長崎県長崎電気軌道若葉町駅は長崎市若葉町に位置しており、最近作った町の名前に合わせて駅名が決められたのである。

日本には「葉」という文字を使った駅名がとまたくさんあると言ったことが分かった。このことは、日本人が自然の緑をよくな愛しているという考え方がもたれているのだろうか。確かに「緑」という文字を使った駅名が全国に15とちろちろかなが多い。と言った事で、次回には「緑」を使った駅に注目したいと思えます。お楽しみに。

日本の駅名あれこれ 「葉」の部

『ヒヤッハッ——狩りの時間だぜえええ！』

時は平成。狩りに行く人々の雄叫びがこだまする。

彼らの言う「狩り」というのは、私たちが一般的に考えている「狩り」ではない。命の尊さを学び、生きる為に、生かさせてもらう為に行う「狩り」とは全く別物。

『やゝ楽しみですなあー！』

彼らにとって「狩り」はただの楽しみ。娯楽の一つである。

とって食べるわけでもない。

ただそれを見るだけ。

『さあ、みんな。そろそろいこうぜー！』

山へ足を踏み出す。

突然の来訪者に、逃げ惑う動物たち。

意に介せず、歩みを進める絶対強者。

『わあ、見て。すく綺麗……。』

辺りを染めるは鮮血色の赤。

狩猟者は恍惚の表情を浮かべ佇んでいる。

まるで、永遠に時が止まったかのように——

暦は既に十月を迎えている。

秋も深まるこの季節。

そろそろ紅葉狩りの季節がやってまいります。

「おめでとーじいびきますっ。彼氏さんできたのですねっ。」  
友達の幸せを自分のことのように喜んで、温かい言葉を入れる。今は大学は違うけれど、彼女はあたしの最高の友達。  
「うん、大学の先輩なんだけどさ、今日の午後初デートなんだ。ところで兄貴の方とはどうなのよ？」

彼女は顔を真っ赤にさせて俯く。そんな所も可愛らしく、あのバカ兄貴には勿体ないと思うのだ。  
「えっと……ずっと煙草やめて欲しいなあと思っていました

だが、勇気を持って頼んでみました。でもその所為でしようか、昨日から元気がないんです。」

「ああ、それは……、多分あたしが彼氏で来たよって報告したからだと思う。」

でも兄貴とこの子が付き合つと聞いた時、妙な寂しさを覚えたのも事実である。

「ごめん、一生のお願いだけど、」兄貴に渡してもらつていいかな？」

そう言つて彼女に一枚の兄貴宛の葉書を手渡す。

ぱあっと明るい笑顔の花を咲かせて、快く引き受けてくれる。これはやはり兄貴を爆発させるしかないと思つた。

高校時代の友人に会つたのは、久しぶりのことだった。今日は、彼の大切な妹さんをいたたく身となつて、きちんと挨拶せねばと思つた次第である。

しかし一本葉巻を薦めると、あっさりとして断られてしまう。「わりい、俺彼女から禁煙を頼まれたんだよ。」

なるほど。早速へお兄さんへに嫌われたかと思つた。彼の恋人は少々、いやかなり抜けている所もあるが優しく

温和な後輩らしい。しっかり者で面倒見の良い彼のことだから、何だかんだ言つて過保護で甘いんだろなあと思像する。

「何ニやついてるんだよ。」  
「いや、きつと君は彼女さんをとでも大切にしているんだろなあと思つて。」

「……黙れ、こんな野郎に妹を預けられるか。」  
「でも僕は、道で知らない女の子の頭についた葉っぱを取

つてあげるような紳士だよ？」  
「変態という名のな、この偽善者が。」

でも僕は、悪態をつきながらも友人のことを信頼してくれていることを知っている。その信頼に応えるのも含め、彼女を幸せにしてあげなくてはと改めて心に誓つた。

# love r

ひらひらと赤い雪が舞うのを眺めながら、私は歩を進めま

す。もう紅葉が美しい季節になりました。  
手元には私の友達から預かつた葉書が一枚。いつもしゃり者でささやかな相談などにも親身になつてくれるのですが、今回は私を頼つてくださり、とても嬉しく思います。

しかし突然、視界が赤から黒へと暗転しました。前を見ずに歩いてた所為でしょうか。ぽすつと男の人にぶつかつてしまつたようです。

「いや、ちうらは平気だけど……頭に葉っぱついてるよ。」  
「……」

「……」  
「……」

「……」  
「……」

「……」  
「……」

「……」  
「……」

「……」  
「……」

「……」  
「……」

「……」  
「……」

「……」  
「……」

「……」  
「……」

「……」  
「……」

「……」  
「……」

「……」  
「……」



無気力のはっぱ

病床。僕はそこで一日を過ごす。

起床時間、看護婦が体温を測りに来る。朝食、「健康に良さそうな」食事が運ばれてくる。その後は医者が見診に来たり来なかったり、家族や友達が来たり来なかったり。昼食を取って、夕食までに点滴の交換やら何やらあったりして、夕食が終わって暫くたって消灯。これが病床での一日だ。

この退屈な病床には窓がある。窓からは隣のビルが見えて、そこに張っているツタがある、ツタには殆ど葉が無くて、ほんの僅かに生えている葉も、ビル風で今にも吹き飛ばされそうである。この僅かな葉っぱの一枚一枚を僕は心から憎んでいた。

その理由はラストリフという下らないおとぎ話を僕に彷彿させるからに他ならなかった。病気という物は精神がどうこうして簡単に良くなったりするもんじゃない。「病は気から」とか言っている人間はきつと本当に大きな病気になった事が無いのだ、だからそんな簡単な事が言えるのだ。とにかく、あの葉を見る度に僕は不愉快に覆われた。

僕の容態は平行線で、葉っぱの枚数も平行線であった。全く落ちる雰囲気のない葉は寧ろ僕の生命力とか気力とかを吸って元気になっている様子にも見えた。ただでさえ面白くない葉だったのだが、これが担当医の励ましと合わさると更に不愉快なのである。

「病は気から！ 元気があればなんだって治る！ ほら見てみる、あの健気でたくましい葉を。感動するじゃないか！」窓を指さして言う医者のお輝く眼が僕は嫌いだ。

黙っていると彼は僕の肩をぱーんと叩いて大股に出ていく。

医者の元気と葉の元気、これに比例する様にして僕の気持ちは沈んでいく。何を聞いてもつまらなく、何を食べてもまずく感じる様でさえあった。全部あの葉のせいである。

風の強い日や雨の日は少しだけ気持ち晴れる。あの葉が落ちるかもしれないからだ。それでもこの何とも言えない閉塞感が完全に消え去る訳じゃない。

本を読む気にも、勉強をする気にも、絵をかいいたり文を書いたりする気にも、大方創造的と言える行動をする気にはなれず、ただベッドで手を伸ばして電球を見つめる。

葉が落ちる事をなんとなく願いながら一日がただらただらと通るのをただ見過ごす。

それは急に訪れた。台風一過の晴天、ビルを伸びるツタ、葉は綺麗さっぱり消えていた。

清々しく解放されるかに思われた僕の心。それは未だに閉塞感に包まれていた。どうやら葉は閉塞感とは関係ないようだ。電球を見つめてぼうつとする。たとえ退院してもきつと僕はこのままだ。

夕食の時間に何となく窓を見る。 あった。一枚、まだ一枚葉が残っていたのだ。

なんだ、お前のせいだ。フフと笑ってベッドに倒れ、電球を見る。

「あの葉が、最後の一枚が落ちれば、この閉塞感も無くなるだろうな。」無気力に呟く。

秋の落ち葉と小さな出会い

二期も始まり、季節は秋。木の葉は鮮やかに色づき始める。今日は先生のつまらない挨拶ばかりで授業はほとんど行われていない。さっさと帰ろうと思い、校門を出る。

すると、校門へ通じる並木で座り込んで何かを探している少年を見つけた。

「キミ、何してるの？」

私は思わず話しかける。

その子は一瞬、コチラを振り返るが、無視して、また地べたに目を向ける。

……可愛くないな。

「ねえ、何探してるの？ 良ければ私も手伝うよ」

「……別にいい」

ちょっとイラッときたぞ。意地でも探すの手伝いたくなってきた。

少年を観察していると、どうやら一枚の葉っぱを手に取り、ジロジロと眺めてから、それを捨て、また新たな葉を拾い上げるという動作を繰り返していた。どうやら落ち葉を探しているみたいだ。

もう少しよく見てみると、どうやら緑の葉を探しているようだ。私も緑の葉を探してみよう。一枚の大きな緑の葉を取り、その子に見せながら尋ねる。

「ねえ、こんな葉はどうかかな？」

「……でかすぎる。そんな葉じゃ契約したときに、その強大なる力が制御できなくなり、自らの身を煉獄の炎で滅ぼすことになるぞ」

……ああ、この子はこーゆー子なのか。

本能が「この子と関わってはいけいけない」と告げているが、私も一時期そんな病気を患っていたので、構ってあげることにした。

「なるほど。じゃあ大きすぎず、小さすぎな

い葉っぱを探せばいいんだね」

「貴様！ 二十四次元世界から刺客か！」

ああ、面倒だなー。

結局、一緒に葉っぱを集めて一時間が経っていた。

「ねえ、この葉もいいかな？」

「ありがとうございます！ お姉様！」

……すっかりデレていた。

なんだ、この攻略難易度の低さ。一緒に葉っぱを集めるだけでデレるなんて。一日一緒にいてあげたら、もう結婚できるんじゃないか？

「で、この葉っぱ、どうするの？」

「……これ以上知ろうとすると、もう引き返すことはできなくなるよ」

……重症だな。前述した通り、私も似たような病気を患って余命二年を宣告されたこともあった(奇跡的に回復した)が、この少年は余命あとどれくらいなんだろう。

そんなことを考えていると、痛いセリフの主からミミ的な何かとっぽ的な何かが生えていた。

「あれ、そのミミとっぽは……」

少年は慌ててミミとっぽを手で触って確認する。あわあわする仕草が可愛い。

「し、仕方ない。これを見られてしまったからには、生きては返さないぞ！」

少年は頭の上に葉を乗せ、何か呪文を唱えた。すると、少年は全長四十メートルの巨大ロボに変身した。

「実は、気づいていなかったかもしれないけど……実は俺、女の子だったんだ……」

なんか思考回路が追いつかないけど……私、実はロリコンだったのかぁー。

そんな秋の夕暮れ。

## 最後の葉

分厚い雲がすぐそこまで降りてきているような空。

冬の始まり秋の終わり。

その木には葉っぱが一枚だけ残っていた。

他の葉っぱは一つまた一つと枯れ、皆地面に落ちてしまった。

残っているのはこの一枚だけ。

その葉っぱはひとりぼっちの寂しさの中、賑やかだった夏の頃を思い出している。

雲ひとつない広い青空。

あの頃はまだ青々とした葉っぱが、空を覆うほど生えていた。

その最後の一枚の葉っぱ。

幸せだった頃の思い出に浸りながら、静かに自分が地に落ちる時を待っている。

もう最後の風がすぐそこまできている。

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	木の葉	18 pt	1 位	1 sp
		<p>「もく」何だろう？いきなり謎でした。  木＝母葉＝ぼくのアナロジーが突飛なようで、そのぶっ飛びぶりがさすがしくもあり。  めでたく今期の表紙を飾った上に、首位までかさって高笑いの「五千字」(通称)さんの今後は??  特別賞：工夫で賞(対句的表現 字体の選び方に工夫が見られた)</p>		
02	日本の駅名あれこれ「葉」の部	1 pt	7 位	3 sp
		<p>1 行目で作者バレ……は置いといて。  前期でおなじみのかたにはおなじみの地名ウンチクさん登場。全部ちゃんと調べて載せたのはエライ！ただ(いつも言ってる気がするけれど)、で、なんなの？という「まとめ」が欲しい。1 行でよいので。  でも初回ならではの、あたたかな読み手さんたちに支えられて最多特別賞です。おめでとう！  特別賞：よく調べたで賞/短くしま賞(長すぎるから) 鉄オタ乙で賞(鉄オタ乙！)</p>		
03	無題(紅葉狩り)	4 pt	5 位	1 sp
		<p>知的なミスリード入ります。  オヤジ狩りを想起させるモノモノしい構えから、じつは・・・という落差演出の展開が楽しく仕上がっています。  桜狩りに紅葉狩り、日本古来のコトバたちの深さに思い馳せつつ。ハッハッハーで攫ったイチオシフレーズ大賞は狙い通りだったでしょうか？おめでとう！  特別賞：プレイ時間4桁賞(モンハンだから)  イチオシフレーズ：「ハッハッハー狩りの時間だぜえええ！」×5</p>		
04	clover	12 pt	2 位	0 sp
		<p>四人四様の恋模様を四つ葉のクローバーに見立てて。はじけたセリフで入る冒頭のつかみも上々。このスペースのなかに、よくも詰め込みましたね～。そのぶん、関係の読みとりがちょっとややこしかったり、個々のキャラクターが薄くなってしまったりしたのは残念だけれど、しあわせは2の2乗。  この書き手さんならではの、心はずむラヴストーリーに今後も期待です。電算室から走った甲斐がありました。おめでとうシルバー・メダル！  イチオシフレーズ：「あたしは一生お兄ちゃんの妹なんだからねっ。」 「殿方さん」</p>		
05	コトノハ一葉	12 pt	2 位	1 sp
		<p>レイアウト派、入ります。  そう、レイアウトはこうでなくっちゃとセオリー通りの緻密な組み立て。網掛け文字にしたので、コピー機通過も楽勝。(→ただの灰色グラデーション等だと、コピーで飛んでしまう懸念あり。ご注意ください。)</p>		

		<p>きれいなコトバだけでなく、悲しさや怒りも放り込んだところが良いですね。 表紙を五千字に奪われたのだけが痛恨か!? でも堂々のシルバー・メダルです、おめでとう!! 特別賞：レイアウト賞（レイアウト） イチオシフレーズ：「ウエルカム」</p>
06	無気力のはっぴ	<p>1 pt   7 位   1 sp</p> <p>最後の葉、くるりとひっくり返したら、こんなヘソマガリストーリーができました。 世の中さまざま。よくできたストーリーに感動するお約束人間ばかりじゃないんだよ、というマイノリティー宣言と受け取れたのですが、せっかくストーリーに仕立てたのですから、ラスト、ピリリと諷刺を効かせられるともっと良かったか。 特別賞：無気力賞（無気力だから）</p>
07	秋の落ち葉と小さな出会い	<p>2 pt   6 位   2 sp</p> <p>TAネッシーさんプレゼント。 1コ枠が空いたので、こんな作品、書いちゃいけないよ！という逆模範演技を試してみたらしい。 コード違反スレスレ（ex.「契約」「デレ」）、ストーリーの一貫性ナシ、伏線未回収、そして巨大ロボ放置のラスト、よいこのみなさんはまねしないように！ 特別賞：厨二病再発賞（治ってないよ！重症だよ!!） ／もう少し考えま賞（笑撃のラスト(笑)） イチオシフレーズ：「実はロリコンだったのかぁー。」×2</p>
08	最後の葉	<p>10 pt   4 位   1 sp</p> <p>ラストは爽やかに。空と葉と、そして風。それだけ。シンプルな構成にしたことで、寂寥感がストレートに伝わってきます。 さいごの一行の余韻がいいなあ。きれいな作品を今後もぜひ。 特別賞：それっぽいで賞（おしかった。技法がうまくて、それっぽいから）</p>